

関西大学国文学会集報

一、平成28年度関西大学国語国文学専修年間行事（一部予定）

平成28年6月15日(水) 二下次生文楽鑑賞教室

（於 国立文楽劇場）

7月2日(土) 第一回国文学会研究発表会（後掲）

10月11日(火) 12日(水) 三下次生宿泊セミナー

（於 高槻キャンパス高岳館）

11月24日(木) 院生合同学術研究会

12月17日(土) 第二回国文学会研究発表会・関屋俊彦

教授特別講演会（後掲）

平成29年1月28日(土) 第一回プレ・ステューデント・プログラム

3月11日(土) 第二回プレ・ステューデント・プログラム

3月22日(水) 新二下次生対象専修別履修ガイダンス

（国文学会主催ポスターセッション併催）

二、関西大学国文学会研究発表会

◇第一回国文学会研究発表会

日 時 平成二十八年七月二日(土)午後一時三十分より
会 場 文学部第一学舎 A三〇一会議室
研究発表

「熊野信仰における「五衰殿女御譚」の形成」

本学大学院博士前期課程 小川 路世

「『古事記』における助字「以」について」

本学大学院博士後期課程 陳 韻

「愛知県内における二人称代名詞の運用方法の地域差」

本学大学院博士後期課程 山本 空

講 演

「文字と絵」 本学教授 乾 善彦

◇第二回国文学会研究発表会

日 時 平成二十八年十二月十七日(土)午後二時より
会 場 文学部第一学舎 A三〇一会議室

研究発表

「近世く近代の口頭語資料における時間語彙」

本学大学院博士後期課程 山際 彰

「芭蕉における「嗅覚」の花——その捉え方と中国語訳——」

本学大学院博士後期課程 胡 文海

「葡萄」考——俳諧における表現をめぐって——」

本学大学院博士後期課程 中村 真理

講演

「年譜考証の勧め」

本学教授 関屋 俊彦

三、関西大学国文学会研究発表会 発表要旨

なお、成稿し、本号に掲載したものについては省略した。

◇第一回国文学会研究発表会（七月二日）

研究発表

「熊野信仰における「五衰殿女御譚」の形成」 小川 路世

（本号掲載）

『古事記』における助字「以」について

陳 韻

周知の通り、平仮名・片仮名がまだ存在していない日本の上代（奈良時代）では、使用していた文字は漢字のみである。現存最古の歴史書である七十二年成立の『古事記』は、当然漢字で書かれているものの、『日本書紀』等と異なり、漢文の正格用法に則せず、その文体は変体漢文であるとされる。同書では、多くの助字が用いられ、文の構成において重要な役割を果たしている。その中でも、特に助字「於」と「以」は、最も用途が広く頻繁に使われる。そこで、本稿では「於」に続き、二番目に多用されている「以」を取り上げ、その意味用法と機能を明らかにした。一方、正格漢文と対照させながら、破格用法（漢文から離れる使用）を見出し、その乖離の度合いから『古事記』の文章の性質にも注目した。その結果、次のようなことが明らかになった。

（一）『古事記』において、漢文助字「以」は、副詞としての用法はなく、主に前置詞（介詞）として用いられ、また、接続詞（連詞）、熟語（所以、是以、以為）としてもよく使用される。

（二）前置詞（介詞）「以」では、時間を表す用法は見られなかったが、概ね（九十四パーセント）漢文の用法と一致し、

漢文的措辞になっている。また、全九十六例中、六例の破格用法が見られ、「原因・理由を強調する」場合には、「以」字を用いようとする作者の意向がうかがえる。

(三) 接続詞(連詞)「以」は、前置詞「以」としての性格(原因・理由を強調する)に影響されるため、主に動作の目的や結果を強調し、前後文には強い因果関係がある。

『愛知県内における二人称代名詞の運用方法の地域差』

山本 空

(本号掲載)

講 演

「文字と絵」

乾 善彦

(本号掲載)

◇第二回国文学会研究発表会(十二月十七日)

研究発表

「近世・近代の口頭語資料における時間語彙」 山際 彰

本発表では近世・近代の口頭語資料における時間語彙を調査

すること、主に次の二点を明らかにした。

(一) 近世・近代の口頭語資料における時間語彙は、一日の中の時間区分を指す語彙が多く見られることが一つの特色として挙げられること。

(二) 近代の文章語資料における時間語彙は、発話時を基準とした時点・期間を表す漢語が多く見られることが一つの特色として挙げられること。

一つ目は、近世に書写された大蔵流の狂言台本である『虎寛本狂言』と近代の落語速記資料である『怪談牡丹灯籠』に見られる時間語彙を調査した結果、得られた特徴である。両資料には「今夜」や「今宵」、「晩」といった一日の中の時間区分を指す語彙が多数確認される。一方で、近代の文章語資料として用いた国立国語研究所による『郵便報知新聞』の語彙調査の結果からはそうした語が十分に確認できない。以上から、(一)が近世・近代の口頭語資料における時間語彙の一つの特色であることを指摘した。また、それに加えて時代・資料を問わず用いられる「今」や「時」、「今日」などの基本的な語は先に挙げた近世・近代の口頭語資料においても高い頻度で使用されること、発話時にごく近い時間を表す「最前」や「先度」などの語がこの時期の口頭語における時間語彙の特徴として挙げられること

についても述べた。

二つ目は、国立国語研究所による『郵便報知新聞』の語彙調査の結果を近世・近代の口頭語資料である『虎寛本狂言』と『怪談牡丹灯籠』と比較した結果、得られた特徴である。二種類の口頭語資料には見られず、『郵便報知新聞』に見られる語彙としては「本月」や「本年」、「昨今」といった相対的に時間を表すものが多く確認される。その内訳を見てみると、発話時を基準とした時点・期間を表す漢語が多数を占めていることがわかった。このことから、(一)が近代の文章語資料における時間語彙の一つの特色であることを示した

「芭蕉における「嗅覚」の花——その捉え方と中国語訳——」

胡 文海

花鳥風月を楽しむ詩人たちは、常に自然風物の醍醐味を客観的に捉える力、つまり物に対する感覚の鋭さを身に付けている。この能力を巧みに運用することによって、詩人たちは神羅万象の世界を言葉で具現することができた。こうした中に、嗅覚を怡悦させるものとして、千々の花の「香」が屢々詠まれている。本論では、芭蕉発句で薫香を放つ「花々」（紙面が限られているため、本発表では梅の香だけ）をとり挙げ、従来の翻訳作品

とは異なり、単なる視覚的表現としてではなく、嗅覚的表現として取扱ひ、その「梅香」の裏にある感情を掘り下げ、中国語で再現する方法を求める。

漢詩を調べた結果、宋から「梅の香」をモチーフとして多く詠まれるようになったが、梅花を対象にする際、梅の香を最初に想起する共感が薄いのである。それと同じく、『万葉集』においても「梅の香」を詠んだ歌は巻二十に収録されている市原王の歌以外に確認できない。これに対し、嗅覚の視点から梅花を吟詠する歌は『古今集』から圧倒的に多くなり、時として「梅の香」に「昔」を偲ばせる力まで添え加えられたのである。

その上、和歌や漢詩を受け継ぎながら、独自の文化を創り出すとする俳諧にも、梅の香にかなりの比重を置くことが数多くの例から看取できる。更に、芭蕉の句において写実的あるいは写生的に梅を詠んだ句は少なく、寓意を伴いながら、梅花、就中その清らかな香りは挨拶の気持ちの担い手として用いられるケースが多い。

従って、「暖簾の奥ものふかし北の梅」一句も、「薫香から、北庭には梅花が咲いていることを察知した」というように、嗅覚に着目しながら捉えるべきだと考える。そこで、筆者従来の中国語訳を分析し、「暖簾深处、北梅襲々」と、双声疊韻を用

い、梅香の役割を強調しながら訳してみた。

「葡萄」考——俳諧における表現をめぐって——

中村 真理

日本において葡萄の栽培が始まったのは中世末期のことであるが、それ以前から、日本の漢詩でも葡萄は題材となっていた。中世五山の漢詩では中国における漢詩の表現が継承され、葡萄の実を龍珠や水晶、葡萄の蔓を龍鬚といった、伝説上の存在や宝物など高貴な存在に喩える作品が目立つ。当時の葡萄は、絵画や文学を介さなければ知らない存在であり、あるいは葡萄そのものが珍しく高貴なものと認識されていたためとも思われるが、この傾向は、日本で葡萄の栽培が一般化した近世以降も、漢詩では踏襲されている。しかし一方で、俳諧における葡萄の表現には受け継がれていない。

俳諧作者たちが葡萄の比喩に好んで用いたものは、「紫色」と「棚で栽培する」という共通点を持つ「藤」であった。初期俳諧では「春の藤のゆかりの色やぶだう棚」（続山井・勝盛）のように説明的な句作りがなされていたが、時代が下ると藤を詠む和歌の伝統的な表現である「春が暮れる」「来迎の紫雲を思ふ」「松にかかる」などを用いて、「藤に春暮て蒲萄に秋暮ぬ」（麦林集）

や「紫の雲もたなびけ葡萄棚」（隙の駒・三省）、「さがらせて松にも見たき葡萄哉」（蘿葉集・也有）などの作例が見られるようになる。

漢語である「葡萄」は、俳諧においては「俳言」に分類され、俳諧性を示す要素としての性格を持つ。一方、藤は和歌の伝統的な詠題である。俳言である葡萄を、雅な題材である藤で喩えること自体が、取り合わせのおかしさ、滑稽味を併せ持つ表現であったと思われる。更にそこに、「藤」の和歌における表現を取り入れ「葡萄」によってパロディ化するという発展が見られるのは、作者たちによる俳諧性の探求の結果であり、常に新奇な表現を求め続ける俳諧という文芸の特質を示す事象であると考えられる。

講演

「年譜考証の勧め」

関屋 俊彦

以前、関西大学では『先生の横顔』という冊子が配布されていて、学生のみならず教員にも随分重宝がられた。時には若いころのままの顔写真と、その方の専門・人となりを短文ながら的確に表現されていた。私が昭和五十四年に関大に赴任した時、どなたが書かれたものであろうか、次のように記されていた。

「多くの資料を的確に操作して年譜考証という実証学の成果を見事に示している」。なるほど、自分は「年譜考証」で認められたのだなと思ったものである。

「年譜考証」で思い当たることがある。修士論文「佐久間寛台と『謠言粗志』」は、関大『国文学』（昭和五十年六月）に掲載されたものだが、育ての親・伊藤正義先生から「作品論は、ともあれ年譜考証が面白かった」とおっしゃってくださった。これ以降、私の研究方向は決まったのである。

年譜考証は、年譜としてまとまったものを見ると、少しも面白くない。ただ史実が並べられているに過ぎない。しかし、ここに至るまでは、クロスワードパズルのように空白だらけである。その空白をひとつずつ埋めていくのが醍醐味である。最後のピースを入れた時、それまで単なる事柄であったのが、すべて生き返ったように見えてくる。

私事ながら著しい効果を挙げたのが「茂山千五郎家の系譜」であろう（『続狂言史の基礎的研究』所収）。活字化された四代目までの系図に疑問を持ち、ついに大藏家二十四世弥右衛門氏のお宅でノートを拝見し、それが善意からのものであるにせよ仮想であることがわかった。「室町時代の天才たち」（『華道』連載）を書くころは、どの時代の人物を研究対象にしても書ける

との妙な自信すらついた。

他人の事績ばかり追ってきたが、皆様にも、なぜ自分は、今、ここに存在しているのかを含めて、わが家の年譜考証をすることをお勧めしたい。古い戸籍謄本・本家伝来の古文書は、くずし字で書かれている。菩提寺の過去帳・市町村史等の調査等、一族に一人でもいい調査の手が入ることをお勧めしたい。汚れていても文化財である。これって国文学の一方方法なのでは？ 勿論、不都合な事実が出てきても冷静に判断することが必要である。

恩師米倉利昭先生が平成二十八年十一月になくなられた。私に関大を去る年度と重なり、いつまでも思い出に残る年になるに違いない。

四、平成二十七年 卒業論文・修士論文・博士論文題目

◇平成二十七年 国語国文学専修 卒業論文

〈国文学〉

- 尾崎 雄太 ファントジー小説『宵山万華鏡』が持つ異界
濱田 周吾 歌語「忘れ草」の研究
友保 温子 三島由紀夫『真夏の死』論——勝の役割と朝子の悲劇——
谷井 菜弥 『今昔物語集』本朝世俗部にみる女性観
久布白麻里 源氏物語中の「宿世」とは何か
指尾菜穂子 田村俊子『あきらめ論』——富枝の決意——
野崎 洋輔 村上春樹『アフターダーク』論——「タコのようなもの」から物語を読み解く——
秋山 碧 有島武郎『星座』論——光の青春群像を読み解く——
飯田涼太郎 安部公房『箱男』から見る都市
磯田 真衣 『伊勢物語』——「色好み」の女性像——
井上 千春 男色大鑑における理想の男色像
井上 佳香 源氏物語の朱雀院
宇佐見袖衣 かぐや姫譚の比較——鶯の卵からの誕生——
大庭 歩 『源氏物語』における予言

大橋 英敏 『建礼門院右京大夫集』の一考察
——右京大夫の選振をめぐる——

小川 路世 『熊野本地』における五衰殿の女御の形成
——女人成仏の視点から——

小長谷知聖 歌枕吉野の変遷

垣端 琴音 「心あてに」の和歌と夕顔の性格

片岡 直人 川端康成「十六歳の日記」論——死生観を中心に——

角野 愛 「白」い装束に対する美の感受
——『源氏物語』を中心に——

北野 彰人 中島敦『わが西遊記』論——悟浄の救いをめぐって——

北野 優樹 道尾秀介『月と蟹』論
——子どもたちが創り出した世界——

北原 桃代 建礼門院右京大夫と源平の争乱
——平資盛との関係を中心として——

久保 美幸 平安時代の男女の性欲
——当時の男女は性を楽しんでいたのか——

栗田 瑞希 陰陽師安倍晴明の実像

後藤田綾香 作品から読み解く大津皇子——万葉集歌を中心に——

小村 絹香 宮本輝「星々の悲しみ」論
——薄命の画家が遺そうとしたもの——

坂田 理歩 『今昔物語集』『本朝世俗部』に登場する動物妖怪
——『夏目友人帳』との比較——

咲野 雅美 伝統芸能における興行——能楽を中心に——

笹田 裕太 なぜ男色という行為が行われてきたのか

流石 栄里 北山の桜の異空間性——『源氏物語』の「若紫」巻——

白滝 麻美 道綱母像——『蜻蛉日記』から見る——

高尾 海咲 『雨月物語』『春雨物語』から見る上田秋成の目指した女性像

竹本 恭子 『曾根崎心中』——「おはつ」について——

長 怜良 六条御息所と物の怪——心の鬼か現実か——

津田 上総 能（隅田川）作品研究——元雅の作能法を中心として——

土田 浩子 「小野篁」をめぐる研究動向——戦後の篁研究——

出水 裕之 旅の文学の需要と背景

——『続藤栗毛』と『方言修行金草鞋』の違い——

寺下 沙織 森茉莉「甘い蜜の部屋」論

——少女が（悪女）に成長した意味——

土肥 久遠 梶井基次郎作品における自我と分身の二重構造論

富田 季咲 柏木の笛と「思はん人」——『源氏物語』横笛巻論——

並川 豊実 三島由紀夫『音楽』論

西川 有紀 『好色五人女』からみる女性像

西村 百華 「人でなしの恋」を軸に見る江戸川乱歩作品の人形論

野上 はな 算説話が後世に与えた影響——『江談抄』を中心に——

濱 修司 内田百閒「旅順入城式」論

——活動写真が生み出す幻想性——

濱田 玲衣 吉原大通会からみる通の概念

東尾まりな 太宰治「女生徒」論

東畠 花奈 芥川龍之介「河童」論——当時の社会問題をめぐって——

日野 利香 鳥羽絵の誕生と変遷

松浜 葉月 本院侍従から紐解く悪女の条件

——平中を狂い死にさせた女——

平田 眞子 近世にみる色男像

廣瀬 千秋 坂口安吾「夜長姫と耳男」論

——夜長姫の遺言の深意——

福井 しほ 辻村深月「凍りのくじら」論——現実感をめぐって——

福田 晋也 源平合戦における卑怯な戦い

福田 光 「グスコープドリの伝記」論

——ブドリの成長を読み解く——

藤村 茉由 『竹取物語』の祖型について——『今昔物語集』と『海道記』の竹取説話との比較を中心として——

古谷友香里 『とはずがたり』における「心」について

堀 佑季 夢枕獏「陰陽師」論——安倍晴明は何故美男子なのか——

堀本 渚 『伽婢子』から読み解く江戸の女性の理想像

松田 龍成 川端康成『片腕』論——「遠くの自分」をもとめて——

松村 真衣 「春告鳥」の表現と恋愛

丸谷英美奈 解き放たれた日本神話

宮下 理冨 「不連続殺人事件」論——心理の足跡を辿る——

宮元 香澄 好色一代女から見る遊女の姿

村下 愛 谷崎潤一郎「魔術師」論

——動物表現から分かる「彼の女」の存在——

八尾 侑司 『源氏物語』における出産と乳幼児の役割について

——薫を中心として——

八木 敬介 『義経記』に描かれなかった源義経

山口 愛 『とりかへばや物語』の「すくよか」考

吉田 開 柳田國男の国語教育観

吉田 拓也 石川淳『天馬賦』論

——ムラキの役割の再検証と新たな志向性の考察——

吉田 美月 「それから」における代助の心情

——花、絵画、芸術的要素を通して——

吉永 栄子 日本中世における「児」に関する研究史稿

渡部保菜美 岡本かの子「川」論

〈国語学〉

大森 康平 漫才用語の日常語への浸透

——関西人のフリ系語彙の使用認識——

生田 成美 映画『オズの魔法使』に見る洋画日本語字幕・吹

替えにおける1・2人称代名詞の特徴

市橋 奈央 源氏物語の会話文の特性——文末表現を中心に——

大久保北斗 形容詞性接尾辞「—っぽい」の使用実態を考える

木川 愛里 小学校国語教科書と児童向け日本語学習者用テキストの比較

北畠 佳奈 校歌に歌われるテーマと象徴語としての地域性語句

佐々木美佳 食感に関するオノマトペの比較

玉石 真理 播磨方言における行為指示表現

萩本 千珠 日本語学習者のあいづちの使用について

三宅なつ美 「祈る」の変化について

山口 翔平 動詞「さす」における用字「差」の広がり

橋本 一樹 慣用音から見る日本漢字音

小松 真子 大阪方言の待遇表現ハル・ヤル・ヨルについて

◇平成二十七年九月期 修士（文学）取得論文

〈国文学〉

唐 甜 源氏物語歌集の研究

◇平成二十八年三月期 修士(文学) 取得論文

〈国文学〉

北島 紬 土佐日記の主題論——和歌のための虚構——

孫 儒珍 古代和歌におけるホトトギスの表現

陳 迪 陳舜臣「北京悠々館」論

——歴史的事実と架空の物語との交錯——

東 暁子 『簞物語』の研究——承空本の伝本研究を中心に——

藤井 里佳 『竹取物語』の再読——本文改編の可能性をめぐって——

松川奈津実 井上円了の神道観

——戦時における神の奇瑞譚をめぐって——

村尾 友果 平安後期物語の垣間見における研究

横田 元 室生犀星「蛭の子」論——騙し絵の文字——

〈国語学〉

田中 涉 接続詞におけるトコロガと従属節におけるトコロガ

越智 優子 錦絵新聞の文章研究

山際 彰 近い時間を表す語彙

◇平成二十八年三月期 博士(文学) 取得論文

〈国文学〉

北井佑実子 『貫之集』の基礎的研究